



福祉と農業のマッチング、自然栽培で自分もみんなも健康に。

## ■ PROFILE 事業類型:福祉事業所 (A型)

合同会社ソルファコミュニティ

代表者名/玉城卓(たまきすぐる)代表 社員・スタッフ/6名  
利用者/19名(精神・知的・発達・身体・難病)

## ■ 事業概要

・施設外就労:畑作(露地栽培):大根/じゃがいも/オクラ/玉ねぎ/コネギ/空心菜/唐辛子・ハウス:いちご/トマト・市場内選果作業等・自社農場の整備を計画

## ■ 農福連携をはじめたきっかけ

9箇所の自社農場にて生産活動。島にんじん・たまねぎ・じゃがいも・セロリ・バナナ・ローゼル・パタフライピー・レモングラス・コーヒ・養蜂・カンダバー・八升豆・ゴーヤ・ヘチマ・冬瓜・オクラ・トマト・マンゴー・アセロラ・釈迦頭・ナツメ・スターフルーツ・パニラビーンズ(研究中)ほか。

## ■ 沿革(画期区分)

平成25年(2013) ソルファコミュニティ設立 第1農場

平成26年(2014) 第2農場

平成27年(2015) 第3農場 第4農場 イオンと取引開始

平成28年(2016) 第5農場 高原選手と開墾

平成29年(2017) 第6農場 農福マルシェからイオン常設へ  
農業委員会会長就任

平成30年(2018) 一般社団法人パニラコネクション琉球発足

令和元年(2019) 第7農場・第8農場・第9農場 パニラビーンズプロジェクト(内閣府事業)開始

## ■ ソルファコミュニティのマッチングストーリー

### 福祉のあり方を模索し、農福へ

福岡の福祉系大学を卒業、介護老人施設勤務後、帰郷し障害者就労支援A型事業所に入職。未経験でサービス管理責任者を任せられ自分なりの支援のあり方を模索。次第に事業所の方針に疑問を持つように、やがて自力で事業所を開設し、作業内容として農業を選択。農業を選んだ理由は、1. 那覇に隣接し都市農業が盛んな地域であったこと。2. 島野菜であれば障害者でも作りやすいこと。3. 栽培技術を指導してくれる協力者(K氏)がいたこと。の3点である。

### 「コトノネ」から高原選手との出会い

自然栽培パーティーから有機栽培の方法を学ぶ中で、障害者就労と農業をテーマに取材している出版社「コトノネ」とつながり、元Jリーグの高原選手を紹介される。同選手が沖縄県チーム構想とともに農業を始め、その技術支援を行なったことにより、ソルファコミュニティの名が県内で広く知られることに。

### 地域課題(耕作放棄地と障害者就労)解決、村内評価

沖縄県及び北中城村は有数の農村地帯でありながら後継者不足が進行、耕作放棄地・荒廃農地が増加。そうした中で福祉事業所が借地により農業を進めていくことが村内で次第に評価を高め、その存在意義を役場及び村民より認められることとなる。そうした評価により、2017年に農業委員会会長に選出されることとなった。



## 障害特性より「個性」重視

また、障害者就労支援のためのケアもきめ細かく行い、障害特性よりも「個性」を重視。スタッフと日常的な議論のもと、利用者それぞれの個性・要望に応じ作業工程を工夫している。

## ■ ソルファコミュニティのマッチングポイント

### 1 マッチングの形態

敢えて障害種別で業務を分けず、個性に合わせ業務分担(力仕事・細かい作業・全体を見る人など)。→月1のスタッフミーティング。また、ソルファの考える農福連携は、多職種間の連携を重要視し、農業と障害者福祉だけでなく、教育や行政、民間企業、スポーツクラブ、地域住民が様々な形で重層的なネットワークでつながっている。

### 2 その発展過程

在籍が長い利用者には大まかな指示しか出さず、ゴールイメージのみ共有しプロセスは本人に委ねる。サッカークラブのスポンサーであるネスレとの「コーヒー」の試験栽培など連携先が数多くある。

### 3 行政による財政的・人的支援

農政課による借地交渉同行や振興課による国産パニラビーンズの生産体制整備事業(国庫補助金)活用など。

### 4 農業関係団体・福祉関係団体との連携形態

自然栽培パーティ「チーム沖縄」として全国の事業所と連携。沖縄マルシェを開催。沖縄独自の連携として沖縄農福ラボの設立を準備中。

### 5 マッチングの対象

地域:北中城村・中城村 品目:左記参照  
利用者:左記参照

### 6 コーディネーターの育成方法

定期的なスタッフミーティング。みんなで考えてみんなで決める。全員が右腕。全員に全部話し、相談する。「農業」も「福祉」どちらも主体となって活動し、それぞれの力を最大限に活かし、地域活性化や課題解決のための活動・場所・人材を育てる。

